

第14回「中村元東方学術賞」授賞理由

受賞者 松本 照敬

大東文化大学教授

第14回中村元東方学術賞審査委員会報告

審査委員長 前田専學（東方研究会常務理事）

2004年10月11日インド大使館

松本照敬博士は、昭和一七年のお生まれで、昭和四〇年三月早稲田大学第一文学部哲学科卒業後、同年四月に東京大学大学院人文科学研究科修士課程に入学、同博士課程に進学して間もなく、抜擢されて昭和四四年から昭和四七年まで、中村元先生を主任教官とする東京大学文学部印度哲学研究室の助手を務められ、その間の昭和四六年から昭和四七年と、昭和五二年から昭和五三年までの二回にわたってオランダ国ライデン大学に留学、最初は、Ruegg 教授に、ついで Vetter 教授に指導を受けられ、帰国後、財団法人東方研究会専任研究員、立正大学短期大学部助教授、同教授を経て、現在は大東文化大学教授、比較思想学会理事、財団法人東方研究会理事、成田山財団理事長の要職にあられます。

松本照敬博士は、昭和四〇年四月に東京大学大学院人文科学研究科修士課程に入学以来、中村元先生を指導教官としてインド哲学の研究を志され、その研究の焦点を、インド哲学の主流を形成するヴェーダーンタ哲学、とくに一一世紀から一二世紀にかけて南インドで活躍したラーマヌジャ (Rāmānuja 一〇一七—一三七) に合わせてこられました。松本博士の長年にわたるラーマヌジャの研究は、博士が東京大学へ提出されました博士請求論文『ラーマヌジャの研究』（春秋社、平成三年）として見事に結実し、平成二年東京大学より文学博士号を取得されました。

松本博士は、本研究で、ラーマヌジャ及びラーマヌジャ派の文献を精査し、まだ十分に研究されたとは云えないラーマヌジャの思想の本格的な解明を目指されました。その結果、ラーマヌジャの思想は、かれ独自のものではなく、先人の思想の継承者であり、その思想は著しく折衷的で、思索型の哲学者ではなく、実際的な宗教活動家であったこと、しかもヴェーダーンタ哲学のアーチャーラヤの流れとヴィシュヌ信仰の流れを統合しつつも、ヴィシュヌ信仰の流れを重視していることなどを明らかにされました。ラーマヌジャがヴィシュヌ信仰の

流れを重視している事実は重要であり、ヴェーダーンタ哲学がヒンドゥー教のヴェイシュヌ信仰の思想的基盤となっていく先駆的役割をラーマヌジャが担ったことを意味しています。

博士は、ラーマヌジャが、階級制度を否定し、現実肯定を説くラーマヌンダ（一四〇〇—一四七〇）、カビール（一四四〇—一五一八）、ヴァッラバ（一四七三—一五三一）などの思想家を輩出させ、近代思想への道を開いた点を高く評価しておられます。

ラーマヌジャに関する学術的研究は、インドの他、欧米にも若干見られますが、本研究は、それらの先行研究を全て視野に収めて洩らすことなく、しかもこれほどまでに精密・綿密な研究は他に例が無く、また博士論文の他に『ヴェーダールタサングラハの研究』（成田山仏教研究所、二〇〇三年）などを出版され、博士が、ラーマヌジャ研究のみならず、インド思想史・宗教史研究を前進させた功績は高く評価すべきであります。

博士は、以上のように、ラーマヌジャに新しい照明をあてて、ラーマヌジャ研究に顕著な貢献を果たされ、昭和五七年には日本印度学仏教学会賞を、平成四年には日本印度学仏教学会鈴木学術財団特別賞を受賞されました。

博士の研究領域は、インド哲学のみならず、仏教、とくに密教に及び、『ジャータカ全集』第五卷（共訳、春秋社、一九八二年）、『般若心経秘鍵』（成田山新勝寺、一九九〇年）、『密教経典入門』（東京書籍、一九九七年）、『釈尊こころの旅路—ジャータカの世界』（成田山新勝寺、二〇〇三年）など一般読者向けの信頼できる入門書をつぎつぎと出版しておられます。

以上のように、インド哲学・仏教学、とくにラーマヌジャを中心とするヴェーダーンタ哲学の領域における長年にわたるご研究の成果は、まことに輝かしいものがあり、そのみならず、財団法人東方研究会の理事として、その維持・発展に対するご貢献は、中村元東方学術賞にまことに相応しいものと判断され、今回の受賞となった次第であります。